技術・家庭科（家庭科分野）における思考力・判断力・表現力

新しい学習指導要領での目標の一つとして，「生きる力」という理念の下，基礎的，基本的な知識・技能の習得とともに思考力・判断力・表現力等の育成があげられている。附属学校園での幼小中一貫教育における研究テーマも，この思考力・判断力・表現力等の育成を取り上げている。それらの力の育成のため，研究会では児童・生徒の「学び合い」に関する研究を行ってきた。「学び合い」をより深めるために確かな知識・技術を活かし生活を工夫し豊かにすることが，今回の研究会のメインテーマである。

技術・家庭科での学習を実際の生活で活かす力を得るためには，生活を営む上で生じる課題に対して，自ら判断して課題を解決できる問題解決能力が必要である。この問題解決能力とは，課題を解決するまでに段階的に関わる全ての能力を含んだものである。技術・家庭科における思考力・判断力・表現力は，よりよい生活を工夫し創造する力であると言える。これらの課題に対して，様々な角度から考える思考力，その思考力を総合して解決を図る判断力，判断した結果を的確に示す表現力が必要となる。これらの力の育成には，自らが課題を発見し，習得した知識及び技術を活用し意欲をもって追求し，解決のための方策を探るなどの学習や活動等を発達段階に応じて繰り返し行っていくことが重要である。

家庭科という教科は，児童・生徒の日常の家庭生活が主な学習対象であるという特徴がある。しかし，児童・生徒を取り巻く社会環境は変化し，家庭生活は変容，多様化してきた。放課後や休日に習い事をしている児童・生徒も多く，生活体験が不足している児童・生徒も多い。このような生活体験の不足という実情は，家庭生活に対する意識，関心の低下に繋がる不安がある。自分の家庭生活を見つめ直したり，家族などからアドバイスを得ることは，児童・生徒の家庭生活に対する意欲，関心の高まりに大いにつながる。つまり，多様な体験活動を取り入れることにより，生活体験が豊かになるものと期待できる。このような体験活動は，実感を伴った理解を得ることには非常に有効であると言える。

また，児童・生徒が家庭生活に主体的にかかわり，より良い生活を工夫し創造する力こそが「問題解決能力」であると言える。さらに，思考と判断を伴った行為ができると「問題解決能力」が自ずから身に付き，児童・生徒が学校で学んだ知識及び技能を実生活に活かしていけるものと大いに期待できる。このような「問題解決能力」を高めるためには，まさに思考力・判断力・表現力を養っていく必要がある。つまり，思考力とは，児童・生徒が自分の家庭生活から課題を見出して解決方法を考える力，判断力とは最も望ましい問題解決方法を根拠をもって選択する力，表現力とは学校での学び合いから多様な価値観にふれてより良く表現していく力であるとも言える。その際，科学的な見方や考え方，環境に配慮した生活の工夫など，家庭生活を主体的にかつ多様な視点から見つめる機会を意図的に取り組んで重点化を図ることも重要である。また，実践的・体験的な活動を展開する中で，自分や友だちのやり方の思いや気づき，疑問，工夫しようとする姿，家庭生活に関する気づいたことや思いを可視化する工夫も重要である。その結果，友だちのやり方のよさや家庭生活を想起し，それまでなかった気づきなどを話し合いで触れることにより，より良くするためのアイデアも生まれてくる。

本研究会では，確かな知識・技術を活かし，生活を工夫し豊かにすることができる技術・家庭科学習の構築をめざし，学び合いの中から思考力・判断力・表現力を育てる授業のあり方を検討してきた。消費者として，商品を適切に選択し，購入する能力がより一層求められている。そこで公開授業においては，目的に応じて値段や数量，品質など情報を適切に集め，多面的な視点を判断材料として買い物ができるようにすることをねらいとした取り組みも行った。調理実習の食材の購入を通してものを購入する際にどのような視点で買うか検討し，選べばよいかを学習していった。具体的な調理実習の場に必要な材料を購入するということで，子どもたちが商品を選ぶ時の視点をより広げ，より良い買い物の仕方を考えさせることをねらいとしたものである。家庭科として，日常生活に活用する力や態度を大いに養いたい。幼小中一貫教育の11年間を通して，児童・生徒が生活をより豊かにするために生活の中から課題を発見し，自分の知識や技術を活用して課題を解決していく力を身につけさせたい。

（共同研究者：島根大学教育学部人間生活環境教育講座　高橋　哲也）